

---

# 三人桜

雑月 桜華

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三人桜

### 【Nコード】

N3039L

### 【作者名】

薙月 桜華

### 【あらすじ】

ある女子高等学校の入学式の日、桜の木の下で出会った三人。桜のもとに集まった彼女たちがそれぞれの高校生活を経て自分たちの道を歩む。

## 第一話 桜の季節

### 第一話 桜の季節

小鳥さえずる早朝。道路を通るのは会社へ向かうサラリーマンや小学生たち。元気な声が空に響く。

「飛鳥。早くしないと入学式遅れるからね。」

久留生飛鳥くじゅうあすかは急いで制服に着替えた。布同士が擦れる音が聞こえる。彼女は今日から高校生になる。

憧れの高校である舞ヶ丘女子高等学校の制服を着た感想を一言。

「中学のセーラー服とほとんど変わらないんだけど。」

飛鳥は鏡の前で両手を広げた。彼女が通っていた舞ヶ丘東中学校も同じセーラー服。線の入り方が違うだけ。このまま六年間もセーラー服を着ることになりました。採寸したときにわかってたけど。

飛鳥は鞆を持って階段を下りる。居間を見れば兄がご飯を食べていた。三歳年上の兄。のほほんとしてられるのは大学生ゆえか。

飛鳥が外に出ると母親が車で待っていた。家から学校までは自転車です。二十分ぐらいだろうか。今日は車で連れてってもらおう。

車で行ったからといって何処に車を置くかを考えなければならぬ。敷地内に置くわけも無く、知人の家に停めてもらった。知り合いや友達に重要。

「良かったわ。私も高校は舞ヶ丘女子高だからね。娘が同じ高校に行くなんてうれしいわ。」

飛鳥が通う高校は女子高である。なぜか私の住む栃木県には男女別の高校が多い。特に進学校になればなるほどその違いは分かりやすいのだ。この舞ヶ丘女子高も同じ。一キロぐらい離れた丘に舞ヶ丘高校がある。そちらは男子ばかりの男子校である。ちなみに舞ヶ丘高校が舞高で舞ヶ丘女子高が舞女である。これは中学校のころか

ら先生にも通じる呼び名だ。

飛鳥は車から校門までの道を母と歩いた。桜の木が敷地内に沢山ある。彼女が校門を入ったとき、一際大きな桜の木が見えた。これまで二度学校に来たものの、桜の木をしっかりと見るのは今日が初めてである。

「大きな桜の木ね。ちよつと見てくる。」

「ちよつと待つて。」

母親は腕時計で時間を確認している。

「五分くらいね。そしたら戻ってくるのよ。」

飛鳥は母親に頷くと大きな桜の木に向かった。

飛鳥は桜の木は近づくほど大きさを実感し、何年もこの場所での学校を見ていたのだらうと思った。そんな学校に彼女も今日入学するのだ。ふと、周りを見れば何人か同じ桜の木を見ている人たちが居た。みんな新入生だらう。しかし、声をかけづらい。それに声をかけてくる人間は居ない。そうこうしているうちに五分が経ってしまった。彼女は急いで母親のところに戻る。

「どうだった。私も高校に居た時はあの桜をよく見たわ。」

飛鳥は昇降口で別れると上履き履き替えて自分のクラスに入った。ちなみに彼女のクラスは四組だ。彼女が教室に入ると何人かはこちらを向き、その中の二、三人が挨拶に来た。一人は中学が一緒のよく知らない子。他の二人は知らない。本当に知らないのだから仕方ない。しかし、その中の一人は違った。

「あなた。さつき桜の木を見てた人でしょ。私も見てたんだよね。なんだ、同じクラスかあ。」

飛鳥は突然話しかけられ、彼女の言葉をうまく理解できなかった。

「あなた誰な……。」

「ああ、私は海老原紗綾。よろしく。」

紗綾は飛鳥と握手する。力が入っているためか腕が波打った。関節が伸びる感じがしてちよつと痛い。

紗綾の髪は短くてセーラー服を着ていなければ男女どちらなのか

すぐには答えられないと思う。ボーイッシュとはこういう人を指すのだと思った。

「はいはい、やめましょうね。」

そんな紗綾を優しく止める人。飛鳥に近づいてきたもう一人。その子は飛鳥と紗綾の手を離れさせた。

「ごめんなさいね。紗綾ったら力の加減を知らないから。」

すかさず紗綾が反応しているが、その子は無視して続けた。

「私は阿久津遥あくつはるかです。よろしくお願いします。」

遥は飛鳥に丁寧にお辞儀をした。

「あ、久留生飛鳥です。よろしく。」

飛鳥は反射的にお辞儀をしていた。遥はいいところのお嬢様なのだろうか。遥が顔を上げるとともにバスガイドのように紗綾を指した。

「こんな紗綾の友達です。」

「こんなって何。こんなって。」

紗綾は我慢できず遥につっこむ。遥も嫌々言いつつ楽しそうだ。

仲が良さそうだ。

「私も紗綾と一緒に桜を見ていたんですよ。その時紗綾が……えつと久留生さんを見つけて。一緒に桜を見ていた人が同じクラスに揃うなんて凄いですね。」

「久留生じゃなくて飛鳥って呼んでよ。」

紗綾を見れば諦めて飛鳥を見つつ、遥の肩を軽く叩いた。

「これも何かの縁。三人仲良くしていこうよ。だって、ここは女子だけなんだからさ。」

飛鳥は改めて教室を見回す。教室に居るのは女子だけ。女子高なので当たり前だ。

「そうね。入学式前にクラスの人と喋ることが出来て良かったわ。」

飛鳥は二人から離れると割り当てられた席に座った。天井に大きく息を吹きかける。クラスの一部分の人と仲良くなれたが、あくまで一部である。まだ周りに居る生徒の名前は知らない。故に居心地は

良くない。目に見えぬ緊張感が教室の中に広がっている。クラス全員の自己紹介が済めばもつと居心地が良くなるだろう。お互いを知ることが大切だ。準備期間に担当した先生もクラス担任にはならな  
いだろう。全部入学式からなのだ。

ほとんど空のカバンを教室後方の棚に入れたとき、準備担当の先生が来た。見た目おば様。幾多のクラスを持ってきたと見える。

「これから入学式です。出席番号順に並んでついてきてください。」  
飛鳥たちは体育館へと向かう。体育館に向かうセーラー服の集団。みんな少々大きめに制服を作っているためかぴったりでは無い。

教室がある棟を抜けて体育館へ。すこしずつ聞こえてくる音楽。前後での他愛の無い会話。紗綾と遙は番号が離れているので気軽に話すことはできない。飛鳥は周りに話せる人が居ない状況に緊張して黙ってしまった。こういう式というものはなれることは無い。特に式の主役となれば何回もするものじゃないからだ。

新入生の黒い線が体育館へと吸い込まれ、式場に並べられた椅子へと学生が格納されていく。入り口近くにある立て看板には「栃木県立舞ヶ丘女子高等学校入学式」と書いてある。

入学式とは面白く無いものだ。遊ぶわけでもなく、ただ偉い人や在校生の言葉をじつと聞くのである。気になることといえば式の途中で紹介される担当する先生たちである。先生のなかには若い男性教師も居た。式が終われば退場する。そういうものである。

教室に戻ってクラスの人間が席についてしばらくすると、先程見た先生の一人がクラスに入ってきた。さつきよりはもう少し若い女教師。入ってくると、何時か見た光景をふたたび見る。

「はい、これから一年間このクラスを担当することになった佐藤栄子さとうえいこと言います。」

佐藤先生は自分の名前を黒板に書いていく。

「それじゃあ、これからよろしくね。ちなみに私は舞女の卒業生です。後輩を受け持つことが出来てうれしいですよ。」

それから少々先生への質問タイム。結婚してるかだとか。してな

いなら彼氏居ますかとか。その辺りから始まって最終的に一般的な質問へと流れていく。

「それじゃあ、みんなも自己紹介しましょう。出席番号順に名前、出身校とあと趣味等を言ってください。」

その後は生徒の中で出席番号順に自己紹介を始める。最初に立ったのは入学式前に遙だった。「あ」から始まるので一番らしい。佐藤先生は「みんなのほうを向くように。」と言っている。

「あっ、あの。阿久津遥って言います。出身は舞ヶ丘中学校です。趣味は……。」

そこで無音の一瞬。再度遙は口を開いた。

「お料理とガーデニングです。よろしくお願ひします。」

最初の自己紹介をこなした遙はかなり緊張しているようだった。椅子に座って安堵の表情だ。

その後も二、三人の自己紹介を終えて紗綾の番になった。

「舞ヶ丘中学から来ました海老原紗綾です。女の子ばかりなので新鮮です。あとは走るのが好きです。よろしく。」

元気の良さが目立つ紗綾。言うべき事を言ってさっさと席に着いてしまった。

番号順に順番に自己紹介をしていく。そして飛鳥の番となった。

「舞ヶ丘東中学校から来ました久留生飛鳥です。趣味は、映画見たり読書したりです。よろしくお願ひします。以上です。」

飛鳥はお辞儀をするとすぐに椅子に座った。飛鳥自身なんとも普通な自己紹介だと思った。もうちょっと変わった事を言えば良かったかもしれない。そんな事を考えている間も他の人が緊張しながら自己紹介をしている。

それにしても女子高だけに教室には女子だけだ。紺のセーラー服の集団。なんとというか当たり前だけど男子が居ない。飛鳥にとってこんな状況はこれまで無かった。故に女子高という世界に入った飛鳥は今後どうなるかと心配になった。

飛鳥は頭の中を漂う諸問題をかき消して、これから始まる新しい

高校生活を考えた。

「はい、みなさん自己紹介が済みましたね。それじゃあ、今日は決  
め事が色々あるので早く終わらせちゃいましょう。」

佐藤先生が黒板に書いたのは「学級委員」の文字。そこから始め  
るらしい。

飛鳥は窓の外を見た。校庭の端にある桜の木が見える。

これから飛鳥たちの高校生活が始まる。まだわからない事ばかり  
だけど、初日から友達が出来た。一日でも早くこの学校に慣れよう  
と思う。どんな高校生活になるのか楽しみだ。

「久留生さん。ちゃんと話し合いに参加してください。」

兎にも角にも授業は真面目に受けようと思う。

## 第二話 昼休みのこれから

### 第二話 昼休みのこれから

入学式が終われば次は始業式。今度は既に学校にいる先輩方と一緒に校長先生がたの話を聴くわけだ。その後は対面式。対面式と言うのは新入生と在校生のご挨拶と言ったところである。

式と呼ばれる行事をこなしてやっと授業が開始される。授業といっても最初は中学の授業を少し高度にしたようなものだ。新しい点といえば書道が授業にある点。書道なんて冬休みか夏休みの宿題ぐらいしか書いたことが無い。

授業ばかりの日々の中で楽しみを見つけるのは容易ではない。

「飛鳥。購買行こうよ。」

紗綾の声で飛鳥と遙が向かうのは昼限定の購買。彼女たちの高校には常時開いている購買なんていうものは存在しない。なので、毎日近くの業者が売りに来るのだ。中身は良くあるパン類、ペットボルの飲み物やデザート類。デザート類に関しては近くの男子校には無いようだ。男子にスイーツは想像も難しい。おっさん高校生がデザート片手に至福の時。そんな想像をすれば背中に悪寒を感じてしまう。いや、それもありがたもしい。

「おばさん。これとこれ頂戴。」

紗綾がパンの山から二つ選んで買っている。遙も買っているようだ。飛鳥自身はお弁当があるのでデザートだけにする。

デザートはカップ入ったケーキから和菓子まである。しかも種類が色々あってどれも食べてみたいくなる。甘い匂いが漂ってきてそうだ。喉から手が出るのなら出してみたい。

「私もデザート。糖分は大切だね。」

一足先に昼食のパンを買い終えた紗綾は飛鳥の隣に来てデザート

を見ている。片手には先程買ったパン類。多めなので今日はパンだけで済ますようだ。

「何がいいかな。」

飛鳥と紗綾がデザートの前で悩んでいると。

「これください。」

遙が先にデザートを買ってしまった。遙は飲み物とデザートを買ったようだ。飛鳥は遙が昼食をパンで済ますのは想像したくないと思った。

「デザートに悩んでも仕方がないですよ。食べたことが無いか美味しかったものを選ぶしかありません。」

遙の言葉で二人はそれぞれやっと思ひ終えてデザートを買う。

飛鳥、紗綾と遙は他人の机を寄せて三人で昼食を食べ始める。

「ねえ、飛鳥と遙は部活動は何かやるの。私は陸上部入ろうと思うんだ。中学からやってるから。」

紗綾はパン類を平らげデザートへ手を伸ばしながら言う。飛鳥は紗綾の自己紹介を思い出す。そういえば走っていることが好きらしい。そうか、運動部なのか。そこで、遙が口を開いた。

「そうですね。ただ何もせずに帰るのも面白みが無いですし……。」

遙は何か考えているようでしばしの沈黙。

「私は茶道部とか入ってみようかなって思います。」

飛鳥は茶道部でお茶をたてている遙を想像し、その違和感の無さに感嘆する。なんて様になっているんだろう。

「飛鳥も何かやらないの。」

ここまできると飛鳥だけが部活動に入らないことになる。部活動をするか帰宅部として勉強と遊びの中に三年を過ごすか。飛鳥にとって重要な問題だ。

飛鳥はお弁当の蓋を閉じてデザートの蓋を開けた。プリンの上にホイップが載ったタイプのデザート。一緒にもらったスプーンをプリンに突き刺す。

「私は入ってみたいけど。どんな部活動があるか知らないから決め

られないよ。」

飛鳥はプリンを一口ほおばると紗綾と遙を見た。

「どんな部活動があるの。」

飛鳥の発言に二人とも驚きと呆れの混じった表情で彼女を見る。

入学式から今現在も各部の勧誘が行われている。勧誘は主に昇降口。気が付かないはずが無い。

「あんたの頭。無関心なことは見事に素通りするのね。」

飛鳥は関心が無かったんだから仕方がないと反論する。その二人の間に分けいるように遙が入ってきた。

「はい、これが舞女の部活動一覧です。興味のある部っておりますか。」

遙が渡した紙には手書きで部活動の名前が書いてあった。飛鳥が一覧を見ようとしたとき、紗綾が一覧表を取り上げる。

「遙すごいじゃん。一覧にしてみると意外と数あるんだね。」

飛鳥は無言で一覧表を取り返し、片っ端から名前を確認していった。運動部の中でふと見覚えのある名前を見つけた。弓道部だ。彼女は中学生の頃は弓道をやっていた。再び高校でも弓道をやってみようと思ったがやっぱりやめた。三年間もやったのだから別の事が見たい。再び一覧を見ていく。運動部の欄を終えて文化部の欄に入る。ふと、彼女はある名前に視線が釘付けになる。

「文芸部……。」

飛鳥は思う。文芸というと彼女は小説を思う。彼女は中学の時に少し物語を書いてきた。すぐに止めてしまったけど、自分で物語を作る面白さを知っている。それがここでまた出来るかもしれない。

「文芸部がなんか良さそう。放課後ちょっと見てみる。」

そこで紗綾が部活動一覧表を飛鳥から取り上げて目を通す。

「文芸部ねえ。二人とも文化部で私だけ運動部なのね。まあ、それ以上に気になる部があるんだけど。」

紗綾は一覧表を飛鳥と遙に見せた。

「アニメ部って何するんだろうね。二人とも知ってる。」

紗綾の間に飛鳥も遙も答えられなかった。実際のところアニメ部って何をするんだろうか。

### 第三話 放課後活動

#### 第二話 放課後活動

飛鳥はある部屋の前に立っていた。ドアには張り紙で「文芸部」と書いてある。昼休みに気になってしまったがために今彼女はここに居るのだ。

飛鳥はノックしようとドアに手を近づけた。すると、室内から声が聞こえてくる。

「じゃあ、私は細田先生のところ行ってきます。」

勢い良くドアが開いた。ドアを開けた生徒は引き戸の前に居た飛鳥に驚きドアから離れた。

「高崎早く行ってきて。」

高崎と呼ばれた生徒は室内から聞こえる声に押されるように足早に部屋を出て行った。

「えっと。新入生かな。入部希望なの。」

中に居る部長らしき人が一度飛鳥を見ると、再び手元の本に視線を落とした。

飛鳥は室内に入ると声が上ずりそうになりながら自分の名前と見学に来た旨を伝えた。

「ふーん、見学ね。こんな部のどこを見学するの。ねえ、久留生さん。」

部長らしき人は本をそばにある大きめ机に放り出すと部屋を歩き出した。

「まあいいわ。私は部長の高松よ。私が三年で、二年がさっきの高崎と今日は来てないけど小林が居るわ。あとは他の部と掛け持ちで大滝と佐藤だったかな。ちなみに顧問は細田先生。まあ、一年生だから知らないと思うけど。」

飛鳥が室内を見れば彼女以外誰も居ない。よく見れば部屋の右側には本棚があつて中にはつづりひもでまとめられた本が幾つもある。その隣には大きめの机があり、パソコンとプリンタが置いてある。

部長の高松は両手を広げて部室を示した。

「うちの部は見ての通りよ。文芸全般を各自気長にやってるわ。あとは定期的に作品を一冊の文集にまとめて学内と学祭で配るくらいかな。」

その時、背後のドアが開く音がした。振り返れば高崎が戻ってきていた。高崎は飛鳥の前を素通りすると部長の高松となにか話している。

「……あと一本なんて書けないわよ。だって、……。」

途切れた会話が飛鳥の耳に届く。一本、もう一本必要とはどういう事だろうか。じつと二人を見ていた飛鳥はふと部長の高松と目が合った。飛鳥はその目が一瞬大きくなったような気がした。すぐに高松は目を逸らして会話を再開する。次は高崎が飛鳥を見た。飛鳥は何が起きたのか。自分に何か関係することなのだろうかと色々考える。

高松が高崎の肩を軽く叩くことで二人の会話はひとまず終了したようだ。高松は飛鳥の前に来た。

「久留生さんだっけ。あなたはこの文芸部で何がしたいの。」

高松の突然の問に飛鳥は戸惑いながらも自分は小説が書きたいと言った。すると、高松は素早く高崎を見て頷いている。何か勝手に進行しているような気がした。

高松は満面の笑みで飛鳥を見た。

「まあ、これも縁よね。あなたうちに入ってみない。まだ新入生入ってないのよね。どう。」

高松の満面の笑みの中にも何か嫌な予感があつた。それでも小説は書きたいので入部を希望すると返答した。

途端に喜ぶ高松と高崎の二人。手と手を取り合つてうれしそうだ。二人ともひとしきり喜ぶと高松は飛鳥の前に来た。

「じゃあ、来月中旬までに作品一本書いてきてもらえる。短編でも長編でもいいわ。」

高松の突然の言葉に飛鳥は固まってしまった。なんとか反論しようとして口から声を出そうとするが高松の声にかき消される。

「来月中旬に出す文集に載せるから。ああ、大丈夫よどんな出来でも出すから。形式はパソコンのテキストファイルの形式で持ってきてね。まずは手書きで書いて、このパソコンで打ち込んでも良いわ。じゃあ、よろしく。」

飛鳥は何も言えずに頷いてしまった。飛鳥は明日から部屋に来ていいと言われ、そのまま部屋を出た。落ち着いてみたら、飛鳥は小説を書けば文集に載るという状況に今居る。強引とはいえ、新入生として入ってすぐに書いた作品が文集に載るのなら良いのかもしれない。

飛鳥は軽く背伸びをして歩き出す。その時、ふと今後の予定を思い出そうと手帳を取り出した。そこに書かれていたのは来月上旬に実力テストがあり、下旬に中間試験。

学業と部活動の両立は言葉で言うほど簡単じゃないと思う。

## 第四話 初作品集

### 第四話 初作品集

放課後の教室。飛鳥はぐったりと机にうつ伏せで寝ていた。

「大丈夫。なんか元気無いみたいだけど。」

遙が飛鳥の変化に気が付く。紗綾がなになにと言っただけでちよっかい出してくる。飛鳥はゆっくりと起き上がって二人を見た。

「やっと小説書けたの。実力テストの合間に書くのは厳しいわ。」

飛鳥は先程文芸部の先輩に自分の小説を渡してきた。実力テストの中でどうにか書くことが出来た。

「そっか。飛鳥の文芸部ってなんか作品出さなきゃいけないんだよね。面倒そうだなあ。やっぱり私には陸上部が合っていそう。」

紗綾は遙を見て続けた。

「遙は茶道部だし。飛鳥だけなんか違う部活動だよな。創造するかどうか。」

「そうそう……妄想。」

遙がふとつぶやく。そこへ紗綾は素早く手の甲でツツコミを入れる。

「違う。新しいものを始めてづくりだす創造よ。まあ、妄想だと思っただけだね、ねえ。」

飛鳥は紗綾の視線で固まる。小説を書いてみようと考えて、だれど書くことが無いとわかると自分のしたいように話を創ってみようとする。だけどそれって自分の妄想を形にしているだけじゃないかと。

「妄想は書・き・ま・せ・ん。」

飛鳥はわざと区切ってハッキリと言った。小説を書く事は自分の妄想を形にしているようだ。しかし、それは二次創作の類で十分に

ある。妄想ばかり、都合の良いことばかりを書けばご都合主義が見えてくる。

「飛鳥は実力テストが終わって小説の作品が書けたみたいだけど。月末は中間試験よ。」

飛鳥は紗綾を見上げるとすぐにうつぶせになった。好きでしているのだからと納得するしか無い。

「定期的に作品を出さなきゃいけないんだよ。どうしよう。こんな状態でこの先やっていけるのかな。」

飛鳥は肩を叩かれて起き上がる。叩いたのは遙だった。

「私は自分から小説を書いたことが無いのでわからないのですが、何かを創りだすことは何かを消費するよりも難しいことだと私は思います。書く事が好きならもう少し続けてみてはどうでしょうか。」

紗綾が遙の横から覗き込んできた。

「まあ、小説を書くだけならどこかの部に所属する必要もないと思うんだけど。他の部活と同じで同じ志を持った人たちと一緒に成長出来るというか。まあ、そういう事。」

紗綾は微笑ながら飛鳥から離れた。

「そろそろ部活行くね。じゃあ。」

紗綾は教室を出て行った。運動部は毎日部活がある。練習の積み重ねが重要だからだ。

「今日部活ありますか。」

飛鳥が帰り支度をゆっくりと始めたとき、背後から遙が言った。

「無い」と答えたら一緒に帰ろうということになった。遙のほうも無いらしい。

校庭から運動部の声が聞こえる中、飛鳥たちは校舎を出た。太陽は傾き始めていたがまだまだ明るい。夏が近づいているためだろうか。

「今回書いた作品ってどこかに掲載されるんですよね。ちょっと読んでみたいなあ。」

飛鳥の書いた作品はもうすぐ刊行される。飛鳥の高校最初の作品

恥ずかしいけど、楽しみだった。

文芸部集合日。部室に行くとなら上がった冊子が机の上に何冊も載っていた。

「一冊ずつ持って行って。」

部長が集まったみんなに出来上がった配っていく。飛鳥は手に取って気がついた。残念な事に冊子が薄っぺらい。人数が人数なので仕方がないとは思った。

「今年度最初の作品集となりました。今年入った久留生さんの作品も加わってちょっとボリュームアップしました。はい拍手。」

部長の先導で拍手が起きる。始めて載ったという事は祝うべきだろう。

「久留生さんの読んでみたけどなかなか面白いと思うよ。特に……。」

飛鳥は恥ずかしくなってその場に小さくなった。初めて人前で自分が書いたものについて言われたからだ。これまでは、眼に見えない人からの言葉だけだった。

「これから残りを置いてくるから欲しい人先に言って。」

部長が冊子の束を持つと各部員にいくらか配っていく。飛鳥も遥のために一部貰った。

「ああ、もうちょっと刷っておけば良かったかな。いつもより少ないや。」

部室を出る時の冊子の数はかなり少なくなっていた。各部員ごとに意外と配る相手が居るようだ。それから次の締切りを言い渡されて解散となった。次回は期末テストの後らしい。

次の日の昼休み。飛鳥、紗綾と遙は机を付けてそれぞれお弁当を用意している。

「ああ、この間言っていたの持ってきたよ。」

飛鳥は昨日文芸部で貰った冊子を遙に渡した。飛鳥の最初の作品。本の全ページ中でちょうど中程、先輩の作品と並べると異様な雰囲気醸し出していた。簡単にいえば差を思い知らされたという感じだ。まだまだ勉強すべきことはある。

「へえ、出来たんですね。」

遙は感嘆しつつぱらぱらとめくるページを紗綾が覗き込んでいる。箸を止めて見入る姿は珍しい。物珍しいのだろう。

飛鳥はその冊子はあげると遙かに告げる。もらって嬉しいかはさておき飛鳥自身が持ち帰るのが面倒だからだ。

「え、貰っていいんですか。じゃあ、頂きます。」

嬉しそうに遙は冊子をカバンにしまふ。それを紗綾はじっと見ていた。

「私も欲しいな。」

紗綾の聞こえるか聞こえないかの声でつぶやいた言葉。

「あ、じゃあこれあげようか。」

遙は冊子を出して紗綾に渡そうとする。紗綾は首を振り弁当を食べ始めた。

「じゃ、じゃあご飯食べたら一緒に読もうよ。飛鳥、今度は二部持って来てね。紗綾も読みたいよね。」

遙の言葉に紗綾は弁当を見たまま頷いた。

## 第五話 それぞれの部活動

### 第五話 それぞれの部活動

ある日の昼休み。何時ものように飛鳥は紗綾や遥と昼食をとっていた。

「そういえばさ。遥の部活ってどう。茶道部ってハッキリ言って中身が見えないんだよね。」

紗綾は箸で遥を指した。遥がその手を丁寧の下ろさせる。

「こういう事をしてはいけないと身を持って学ぶ場所です。色々作法があるので面倒ですが、傍から見ると凄く綺麗ですよ。」

遥は最後に「傍から見れば」と再度繰り返した。慣れないうちは見たままを行うのも難しいらしい。

「ううむ。やっぱり中身が見えない。お菓子を食べてお茶を飲むっていうのはわかるんだけどな。」

「その中にも色々と作法があるんです。」

遥の返答に紗綾は自分には無理だと言って関係ない話に切り替えようとした。しかし、それは許されない。

「紗綾は部活動どうなの。走るのが好きって言ってたよね。短距離とか長距離だったりして。」

飛鳥は遥の部活動に絡めて紗綾の部活動についても聞く。入学して一ヶ月もたてば何かしているだろう。飛鳥自身も小説を一本仕上げているのだから。

「やっぱり聞きますか。まあいいけど。やっているのは長距離だよ。短距離は一瞬で終わって力が出しづらいから嫌なんだよね。それで、飛鳥はどうなんだっけ。」

紗綾はお返しと言わんばかりの嫌な笑みで飛鳥を見ている。これはもう諦めてバトンタッチを受けるしか無い。

「この間言ったように実力テスト中に書いた分が冊子になったよ。今新しい話しを考えているけどどうするか。前の話の続きを書こうかどうしようか悩んでる。期末テスト後だからまだ時間がかなりあるけど。その前に合唱コンクールとか文化祭があるんだよねえ。」

期末テストの前に文化祭、文化祭の前に合唱コンクールがある。合唱コンクールは舞ヶ丘市民会館を使って行われるとか。中学では中学の体育館を使っていたのでなんとなく豪華になるのではと密かに期待している。

文化祭についても中学とは比べものにならないほど楽しいだろう。いや、中学の時間が色々な要因が絡んで楽しくなかったからだろう。三年間で学年全体の空気はだんだん汚れていった。今は義務教育だから色々あるんだなと思うことにしよう。だから、高校の文化祭は楽しまないといけないなと思う。

「そういえば、もうすぐ中間試験がありますよね。」

遙の言葉にその場の空気が固まる。いや、世界が止まったのかもしれない。飛鳥も紗綾も何も言えず動けない。

再び世界が動き出したとき、二人とも取り乱していた。合唱コンクールの前に中間試験がある。今日から一番近いのは中間試験だ。どうして忘れていたのだろうか。

「うあ、中間試験じゃん。どうしようどうしょ。真面目に授業受けてないからノートとってないよ。飛鳥は。」

飛鳥は紗綾に聞かれてなんとかノートはとっていると聞いた。飛鳥自身は授業を真面目に受けている方だ。頭に授業内容が入っているかどうかはまた別問題である。

飛鳥と紗綾は揃って頭を抱える。こんな状態で大丈夫なのだろうか。実力テストを除けば高校入学以来初の試験だ。

「大丈夫ですよ。今から頑張れば間に合いますって。」

飛鳥と紗綾は同時に遙を睨む。なぜそんなに落ち着いていられるのだ。その落ち着き方に嫉妬する。

遙は一瞬だじろいだが、微笑みながら取り乱す二人を交互に見た。

「大丈夫ですって。」  
「本当は大丈夫じゃないと思う。」

## 第六話 試された後に

### 第六話 試された後に

試験というものは待っていてもいつかは来るもので、そこで人は試される。

高校生にとっては中間試験や期末試験、学外模試といった様々な試験がある。ある意味、高校生は一番試される時期なのかもしれない。

飛鳥、紗綾と遙も同様に高校最初の中間試験に挑んだ。

中間試験は、一週間のうちにそれぞれ行われた。高校始まって最初の中間試験のためか内容は簡単だった。だけど、紗綾にとっては部活が無くてやる気が出ないようだ。毎日のように試されるのは受ける側としてはなんとも辛い。これならば一日で全部終わらせるように日程を組んで欲しいくらいだ。

「答案返すわよ。名前呼ばれたら取りに来て。」 各授業中に答案を返していく。答案を見せ合う飛鳥たち。数点の差にクラスメイトは一喜一憂だ。

結果として、飛鳥たち三人とも赤点は免れた。紗綾がちよっと危なかったが、赤点による再試は無いらしい。赤点は学年平均点の半分以下。30点取れば良いわけじゃない。

「やった。試験終わった。これで次は合唱だね。」  
開放された喜びを顔にする紗綾。三人ともそれぞれ安堵する。  
三人とも勉強で出来なかった部活や遊びへ没頭していく。

中間試験の次の週。合唱コンクールの話がクラス担任から出てきた。クラスの学級委員が出てきて話し合いが本格化する。やれ何の

曲がいいだのあの曲がいいだのと言い出す。女子だけだからか、あらぬ方向に行ったり戻ってきたりと忙しい。

結局良く知られる合唱曲に決まる。下手に選ばうとすると合唱用の譜が無かったりと面倒な事が起きかねない。こういう時は王道だ。練習は放課後。はたまた、クラス担任の授業中。授業中に練習して良いのかと聞かれれば、授業をしつかり行つてくださいと保護者は言いそう。だけど、学生の身分からすれば授業よりもイベント準備のほうが楽しいのが現実。

始める前にパート・役割を決める。とはいえ、指揮者とピアノぐらいしかまずは決められない。ほとんどの人は自分のパートがはつきりしていないのだ。それでも、合唱部の愛原さんがみんなをまとめる。彼女はすらすらとしていて、何時も表情がきつい。いや、合唱コンクールだからだろうか。やる気のある子、いやいややる子。本当に様々だ。非協力的な人たちをどうにか引き込むのも今回の合唱コンクールの一つの目的かもしれない。

「はい、じゃあみなさん発声練習から。」

みんなで練習を始める。こういう時、ピアノが出来る子というのは重宝される。その中でも愛原さんは小さいころからピアノを習っていて、合唱部に入っている。ピアノが出来て歌も大丈夫とかなんというリーダー格だろう。出来る子的ポジションでクラス内でも目立つ。実際今回のコンクールではピアノを担当してもらう。因みに指揮は学級委員長が任されたそうだ。きっちりしっかりするタイプなので大丈夫だろう。詳しくは知らないけど。

話ではこの女子高の合唱部は全国の合唱コンクールでもたまに優勝するくらいの実力らしい。とにかく県内ではトップクラスということだ。まあ、愛原さん本人の実力とはまた別の話である。

だから何だというわけでは無い。問題は合唱に触れていないクラスメイトをどうやってまとめるかだ。

飛鳥はメゾソプラノ、遥はソプラノで紗綾はアルトと分かれた。無理して自分に合わないパートで歌うと喉を痛めるので注意するこ

とと言われた。

飛鳥たちは普段それほど歌わないので自分の音域が分からない。ソプラノとアルトまでなら中学でも分かれたが、メゾソプラノとはなんなのだ。話を聞けばソプラノの次に高い音域を歌うパートらしい。女声のみだとさらにパートが分かれるのは仕方がないが面倒だ。男声のほうも分かれるらしい。男声の合唱。力強く見えるがなんか花が無いような気がした。いや、それは彼らに失礼か。近くの男子校にも合唱部があるそうだ。

パートが分けられるとそれぞれパートごとの練習に入る。合唱というのはパート一つでは成り立たない。吹奏楽部の子だって、一人で出来る曲が限られる事と同じらしい。

合唱というのは面倒なもので、誰かが音程を外したりすると、分かる人にはつきりわかってしまう。

「今日はここまで。おつかれさまでした。」

練習が終わりそれぞれが帰路につく。とはいえ、部活動をしている人たちはそれぞれの部活に向う。

「なんか疲れた。合唱って意外と体力使うのね。」

机につっぷす紗綾。遙もいつもより元気が無い。

飛鳥は荷物を持って立ち上がった。これから部活の集まりがある。「それじゃあ部活行くね。」

飛鳥は二人と別れて廊下を歩く。そこかしこから聞こえてくる歌声。

今この時だけは、音楽が学校を満たしている。中学とは違う、男の居ない世界。

けど、何か物足りない気持ちになるのは何故だろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3039/>

---

三人桜

2011年9月17日20時48分発行